

# 仮名字母の出現傾向を用いた大島本源氏物語の調査

齊藤 鉄也 (淑徳大学 経営学部)

本論文では、写本に出現する全仮名字母の分布を比較し、大島本源氏物語の書写者の検討を試みる。調査対象とした写本は大島本源氏物語と、飛鳥井雅康筆とされる『辟案抄』、『伊勢物語』、書陵部蔵三条西家本『源氏物語』「早蕨」、高松宮家本『源氏物語』「朝顔」である。写本ごとの仮名字母の分布を、統計学手法を用いて比較した結果からは、飛鳥井雅康筆とされる写本間の距離は互いに近いこと、大島本 53 巻の中には、飛鳥井雅康筆写本と同程度に距離が近い写本は存在しないこと、を明らかにした。加えて、「宮河印」のある大島本源氏物語写本の一部は互いに距離が近いことを明らかにした。

## Manuscripts Connected with the Ōshima-bon Text of the *Tale of Genji*: A Study of Usage Frequency Patterns for *Kana*-character Variants Tetsuya Saito (College of Business Administration, Shukutoku University)

In this paper, I consider the identity of the copyists of the Ōshima-bon manuscript of the *Tale of Genji*, by comparing the relative distributions of all *kana*-character variants appearing within various related manuscripts. The texts thus examined were: the Ōshima-bon manuscript of the *Tale of Genji*, manuscripts of the *Hekianshō* and the *Tales of Ise* said to be by the hand of Asukai Masayasu, the “Sawarabi” volume of the Imperial Household Archives Sanjōnishi-ke-bon manuscript of the *Tale of Genji*, and the “Asagao” volume of the Takamatsunomiya-ke-bon manuscript of the *Tale of Genji*. The result of a statistical comparison of the *kana*-character variant distributions for each manuscript demonstrated: (1) a mutual closeness of distance between the manuscripts said to be by the hand of Asukai Masayasu, and (2) that not one of the 53 volumes of the Ōshima-bon manuscript evinced any similar distance with the manuscripts by Asukai Masayasu’s hand. It was furthermore demonstrated that a mutual closeness of distance also existed among that subgroup of volumes within in the Ōshima-bon manuscript of the *Tale of Genji* that shared the identifying “Miyakawa” stamp.

### 1. はじめに

本論文では、これまでの仮名字母の出現傾向の調査結果[1][2]から得られた知見に基づき、同様の手法を用いた大島本源氏物語の調査結果を報告する。稿者は、古典籍に特徴的に出現する変体仮名の字母の出現傾向が、計量的手法を用いて古典籍を分析する際に、特徴量として有効である可能性を調査してきた。その結果、藤原定家筆とされる写本は、筆跡とは異なる根拠である仮名字母の出現傾向に基づいて分類できる可能性があること、そのうち一部の写本は年代の推定ができる可能性があること、を指摘した[1]。また、室町時代後期の三条西家の人物によるとされる写本も同様に、一部の写本は書写者や書写年代により分類できる可能性を指摘した[2]。

仮名字母の出現傾向を用いた本調査結果からは、大島本源氏物語(以下、大島本と略す)が、飛鳥井雅康筆(とされる)写本と異なる群に分類され、これらが同一人物による(以下、同筆とする)写本の可能性が低いこと、大島本のうちの「宮河」の蔵書印がある写本の一部は、それ以外の写本と分類できる可能性があること、を明らかにした。

### 2. 本研究の目的と本調査の位置付け

本研究の目的は、書誌学や文献学の知見に基づいた写本に関する指摘を仮説と見做し、計量文献学の手法で検証し、その蓋然性を検討することで

ある。具体的には、仮名字母の出現傾向を用いた教師なし分類手法を用いた書写者の分類を行い、同一の書写者による写本の存在の可能性を調査することである。

今回調査対象とした大島本は、「源氏物語大成」[3]で多くの巻の元となった写本(底本)として採用され、その書写者は飛鳥井雅康とされてきた。しかし、近年、飛鳥井雅康筆に関する疑義が指摘され、飛鳥井雅康とされる写本との筆跡の比較結果と、大島本に存在する蔵書印「宮河」(以下、宮河印とする)の有無、綴じ穴の数[4]、単語の漢字表記[5]が関係あることが指摘されてきた。筆跡の比較対象として挙げられた写本は、公開され利用が可能であり、複数存在している。そこで、本調査では、これらの写本と大島本を分析対象として、上記の仮名字母の出現傾向に基づく書写者の推定に関する知見を用いた検討を試みた。

源氏物語の写本は、書写者や伝来に関して記述した奥書がない場合が多く、書誌学分野の写本の装訂や文献学分野の本文異同といった知見により、写本間の関係が指摘されてきた。これは、転写時の漢字や仮名の使い分け、仮名の字母の用字といった表記は、その過程で変更されることが多く、それらに基づいて分類をすることが困難であることに基づいている。

しかし、その結果として、本文の表記が一致または類似する写本、具体的には、漢字と仮名の使い分けや仮名字母の用字が一致または類似する

写本は、転写元として用いた写本である親本や調査対象としている写本間に関係が存在する可能性がある[6]。そこで、本調査では、仮名字母の出現傾向という本文の仮名の表記の類似性を定量的な距離によって測定するという、計量文献学の手法を用いて写本間関係の親疎の可視化をし、書写者を推定することを試みる。

### 3. 調査対象と本文データ, 方法

調査対象とした写本は、室町時代中期から後期に書写されたとされる大島本 53 帖を中心とし、飛鳥井雅康(1436 – 1509, 以下、雅康とする)、姉小路基綱(1441 – 1504, 以下、基綱とする)、三条西実隆(1455 – 1537, 以下、実隆とする)、三条西公条(1478 – 1563, 以下、公条とする)による(とされる)計 12 写本、近い時期に書写されたと考えられる赤間神宮本平家物語 1 写本[7]の計 66 写本である。大島本は、「関屋」の奥書に書写日時や書写者が記入されていることを根拠に、1481 年に雅康によって書写された、とされてきた。この他に「桐壺」は道増、「夢浮橋」は道澄によって、1563 年頃書写された記述が奥書に存在する。その他の雅康、基綱、実隆筆の写本は、奥書や解説に基づき、書写年代が相対的に 1481 年に近い写本を選択した。これらの写本に加え、公条の写本は同筆の距離の比較対象として用いる。

稿者が作成した調査に用いた本文データは、出版されている写本または画像公開されている写本の本文に基づき、写本と同一の行数と仮名字母を持つ。本文データでは、一音で読む漢字は仮名と見做し、誤写の修正や挿入された文字といった傍記は調査対象とせず、本行本文のみを採字対象としている。調査対象とした写本と本文データに関して、本論文の最後に表 1 としてまとめた。表 1 には、作品名と書写者、書写年、調査対象文字数とその仮名字母数をまとめている。

調査方法は、前稿[1][2]と同様に、各写本の本行本文の 5000 文字程度の変体仮名を対象とし、変体仮名を出現する字母の文字列ごとに集計し、さらに同音の字母の文字列ごとに相対頻度を求めた。この仮名字母の全文字列の出現頻度率を出現傾向と見做して、教師なし分類法である主成分分析とクラスター分析を適用し、書写者の分類を試みた。

### 4. 調査結果の概要と考察

稿者のこれまでの調査[1][2]では、書誌学や文献学の知見に基づいた書写者を手掛かりとして、1 文字の仮名字母の相対頻度を用いて写本の分類を行ってきた。これに対し、今回の調査では、書写者に関する指摘が検討対象の一つであるため、書写者の手掛かりとすることができない。そのた

め、複数の種類の Ngram のデータを用いて、同一の分析方法の調査結果を比較、検討することとした。

最初に、本調査に適した Ngram の文字数 N を探索するために、Ngram の写本間距離を計算し、以降の分析に用いる文字長を調査した。具体的には、二つの写本の本文データから 1 文字から 5 文字までの仮名字母の Ngram を生成し、その写本間距離を計算し、分類に適した文字数 N と本文長を調査した。

次に、調査対象とした各写本の仮名字母の出現傾向に対して主成分分析を、二次分析として非階層的クラスター分析を行い、分類を試みた。加えて、同様のデータに対して、写本間の関係を可視化して分類するために階層的クラスター分析を行った。

最後に、大島本の論点と本調査結果の関係を考えるために、大島本への疑義のうち検討する仮説を挙げ、それを本文データの分析結果に基づいて検討するスタイルで考察を述べていく。

#### 4.1 仮名字母の Ngram の写本間距離

これまで写本に出現する 1 文字の仮名字母の相対頻度を用いて写本の分類を行い、書写者推定の可能性を指摘してきた。このことから、写本に出現する仮名字母が類似しているならば、同じ写本の本文データから生成された字母を組み合わせた Ngram も、その出現傾向は類似すると考えられる。その結果、同筆写本の Ngram を用いた分類結果は、群を構成する可能性がある。そこで、各巻の写本の本文に共通に出現する Ngram を用いて比較することとする。これは源氏物語の異なる巻を比較する場合、生成された Ngram に基づいた単純な分類では、巻ごとに異なる本文を持つことから、本文内容の相違を示す結果となるからである。

加えて、Ngram の文字数が増加した場合、各巻の本文内容を反映した文字列が出現することから、本文分類に適した N 文字がある、と考えられる。さらには、写本の本文長に依存して、共通に出現する文字列が増加し、写本間距離が増加する。これらのことを考慮し、Ngram を用いた大島本の写本の調査を行うこととする。

##### 4.1.1 分類に適した文字数 N の調査

最初に、分類に適した文字数 N を調査するため、調査対象とした大島本の中で全文データ長が大きい、16546 文字の「玉鬘」と、15629 文字の「橋姫」を対象に、本文文字数と距離との関係を調査した。調査は、より本文長の長い「玉鬘」の本文を丁単位に分割し、分割した本文と「橋姫」の全文の距離を、IR 距離[8]を用いて計算している。距離の計算対象は、二つの本文に共通に出現する Ngram とする。これにより、共通に出現する N

文字の仮名字母の使い方の比較が可能となる。この結果を図1に示す。また、写本間に共通に出現する Ngram の数を表2にまとめた。

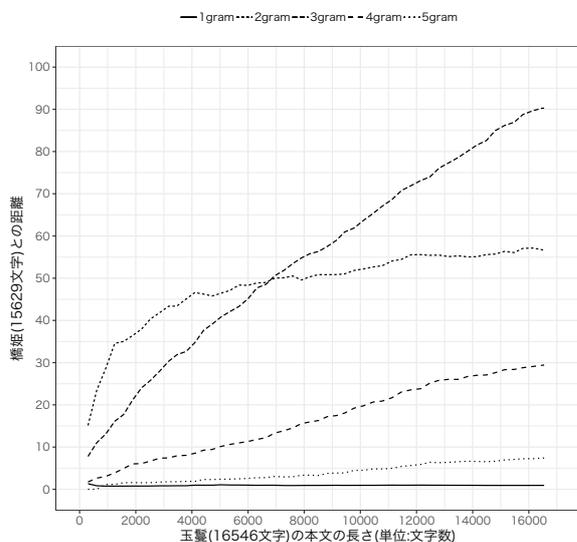


図1 Ngram ごとの IR 距離

表2 写本間に共通する Ngram の数

N	1	2	3	4	5
Ngram 数	103	1968	3101	1336	425

図3からは、「玉鬘」の本文長が増えると、共通して出現する N 文字の断片が増加し、「橋姫」との距離が遠くなることを示している。表2の共通する Ngram の数と図3の結果からは、次のことが明らかになる。1gram の数は本文に出現する仮名字母数のため、共通する断片数が最も少なく、他の Ngram と比較して距離は近い。本文長が増加しても距離は変化せず一定であることは、これまでの調査[1][2]からも明らかである。2gram は、調査する文字数が増加するに従い、距離が遠くなるが、4000 字以上から、その増加傾向が安定する。これは、写本間に共通して出現する Ngram の数の上限に達しつつあることを示している。これに対し、3gram は 2gram とは異なり、文字数が増加するに応じて距離が増加し続けていることから、調査した本文長 16546 文字では、共通する Ngram の数の上限に達していないと考えられる。4gram は共通する Ngram の数が 2gram や 3gram より少なく、距離が近い。5gram は 4gram よりさらに距離が近い。これらの 4gram と 5gram の Ngram の距離が近い理由は、本文が異なることにより共通して出現する Ngram の数が少ないからである。

これらの結果からは、Ngram を用いて本文を調査する際には、共通する Ngram が多く、写本間距離が遠く計算される 2gram または 3gram を用いることが適している、と言える。また、「玉鬘」の本文長に応じて、写本間距離が増加し、2gram と 3gram が 6500 字周辺で交差することからは、

調査対象とした写本の本文長が「一定数」より短い場合は、2gram を用いることが、それ以上であれば 3gram を用いることが適している、と言える。

この「一定数」は、比較対象とする写本の本文長に依存すると考えられることから、異なる本文長を持つ写本と比較した。その結果、本文長の短い 4677 文字の「空蟬」や 1956 文字の「関屋」、5506 文字の「初音」と「玉鬘」を比較した場合、2gram と 3gram の写本間距離が交差しない。これに対し、11542 文字の「行幸」では、7500 字周辺で交差し、7353 文字の「早蕨」では、12500 字周辺で交差する。今回の調査では、15629 文字の「橋姫」より本文長の長い写本と比較は行っていないため、これ以上の本文長で 2gram と 3gram が交差する文字数の詳細は今後の課題ではあるが、調査対象文字数が少ない写本も含めて比較する場合は 2gram が望ましい、と考えられる。

#### 4.1.2 2gram の写本間距離の調査

次に、写本の本文長が異なると共通に出現する Ngram の写本間距離が異なると考えられることから、本文長が短い写本とも比較することを考慮し、「玉鬘」との 2gram の文字列に対する写本間距離を調査した。調査対象とした写本は、上記の「空蟬」「関屋」「初音」「行幸」「橋姫」「早蕨」の全文である。写本間距離には IR 距離を用いた。この結果を図2にまとめた。

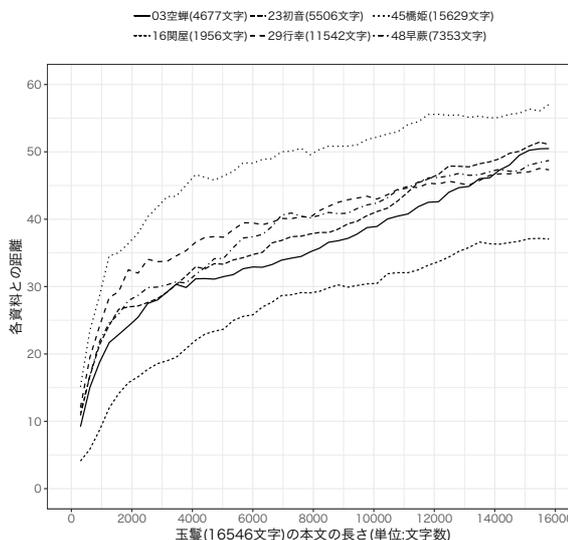


図2 2gram の写本間の IR 距離

図2からは、本文が長い写本と短い写本を比較した場合、本文の長さに応じて距離が遠くなるということが明らかである。本文長が短いと写本間に共通に出現する文字列が少なく、結果として写本間距離が近く計算される。このことから、写本の調査を行う際には、同程度の本文長で行うことが望ましい、と言える。また、本文が 2000 字までは距離の増加率が大きく、それ以上から距離の増加率

が鈍化することも明らかになった。調査対象とする本文が長いほど、多数の 2gram の本文の断片が出現する可能性が高く、結果として 2gram の出現傾向が安定し、分類し易い、と言える。調査では、より本文が長いことが望ましいが、作品や巻ごとに本文は上限があり、必要な文字数が多いと調査の実施が困難になる。このため、少なくとも 2000 字以上で、同程度の本文長の調査が望ましい、と言える。

これらの結果から、本調査では、調査した本文長である 5000 字程度の本文長を持つ本文データに対して、これまでの調査と比較するための 1gram と、1gram との比較のための 2gram の仮名字母の相対頻度を用いた調査を行うこととした。

## 4.2 1gram を用いた大島本の分類

最初にこれまでの調査結果と同様に、1gram の同音の仮名字母の相対頻度を用いて、主成分分析 (PCA) と階層的クラスター分析 (HCA) を行う。調査対象とした写本には、大島本に加えて、書写者が明らかな写本を含む全 66 写本を対象とした。

### 4.2.1 PCA の結果と考察

主成分分析を行う前に、調査対象としている 369 種類の仮名字母のうち、出現しない字母と、多くの資料で出現率が 100% に近く、資料間で差がない字母を除外した。加えて、同音の仮名の中で相関が高い二つの字母は、どちらか一方を分析対象から除外した。これは、本調査では、調査対象とする作品や巻が異なるため、相対頻度を用いていること、また、書写者間で出現傾向が異なり特徴的な字母は相関が低くなると考えられることからである。その結果、計 90 字母が分析対象となった。90 字母の例を挙げると、「い」の字母である「伊」、「え」の字母である「衣」、「か」の字母である「加」「閑」「香」がある。本調査では一音で読む漢字は仮名と見做しているため「香」も仮名として処理されている。

主成分分析では、相関行列を用い、第 1 主成分の寄与率は 17.0%、第 2 主成分の寄与率は 8.5% であった。多数の字母を対象とした主成分分析では、各寄与率は小さくなり、個別の字母の組合せである主成分を解釈することは難しい、と言える。

この主成分分析の結果に対して、さらに二次分析として k 平均法を用いた非階層的クラスター分析を行った。その結果を図 3 に示す。二次分析の結果からは、多くの写本は楕円で示された 4 群に分類された。大島本の写本は、右中央に重なっている群に所属する。しかし、これらの「宮河印」が分類された群には、「宮河印」がある全 19 写本と「宮河印」がない 14 写本も含まれ、「宮河印」をだけ持つ写本の分類はできなかった。

仮名字母の出現傾向を用いた主成分分析では、今回の調査対象のような、複数の書写者による、少数の写本からなる複数の写本群を構成すると考えられる場合は、それを確認することは難しい、と言える。このため、階層的クラスター分析を用いて写本間の関係を考察することとした。

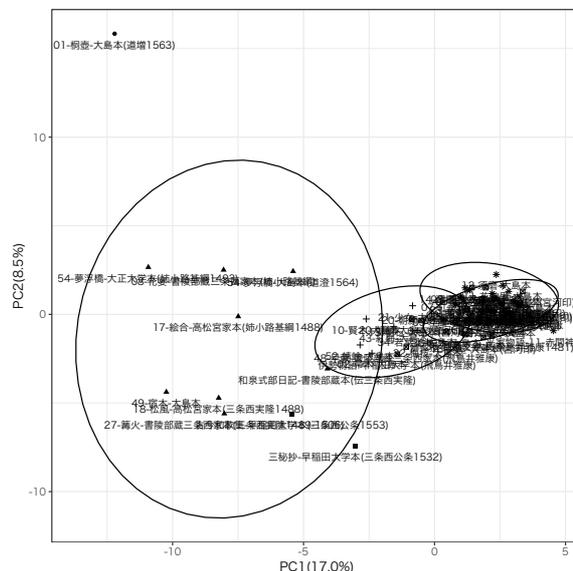


図 3 1gram の主成分分析の結果

### 4.2.2 HCA の結果と考察

写本間の全体の関係を概観し、写本間の距離が近い写本を発見するために、階層的クラスター分析を行った。資料間の距離には IR 距離を用い、クラスター間の距離には、最長距離法を用いた。同筆とされる写本を参考として、群を構成するための距離を 2 とし点線を引いた。それ以下で群を構成する写本は同筆を表す濃い灰色と同筆の可能性のある薄い灰色で群を表している。その結果を図 4 に示す。

図 4 では、中央右に濃い灰色で示した基綱筆写本が群を構成している。さらにその右に、同様に濃い灰色で示した実隆と公条、基綱の写本が群を構成している。同筆写本が群を構成し、他の人物とは別の群を構成していることから、同筆写本は互いに仮名字母の出現傾向が似ていることを示している。書院部蔵三條西家本「篝火」が他の実隆筆写本と距離が遠い理由は、本文文字数が少ないからである。但し、大島本「花散里」のように、本文文字数が少ないにも関わらず、「須磨」と写本間距離が近い場合もある。これは、仮名字母の出現傾向が近いことを示している、と言える。

また、中央と右には薄い灰色で示した「宮河印」を持つ写本が別に群を構成している。「宮河印」を持つ写本のうち「閑屋」と「朝顔」は距離が遠く、群を構成していない結果となった。

この他の、書写者は指摘されていない灰色で示した写本は同筆である可能性を指摘することが

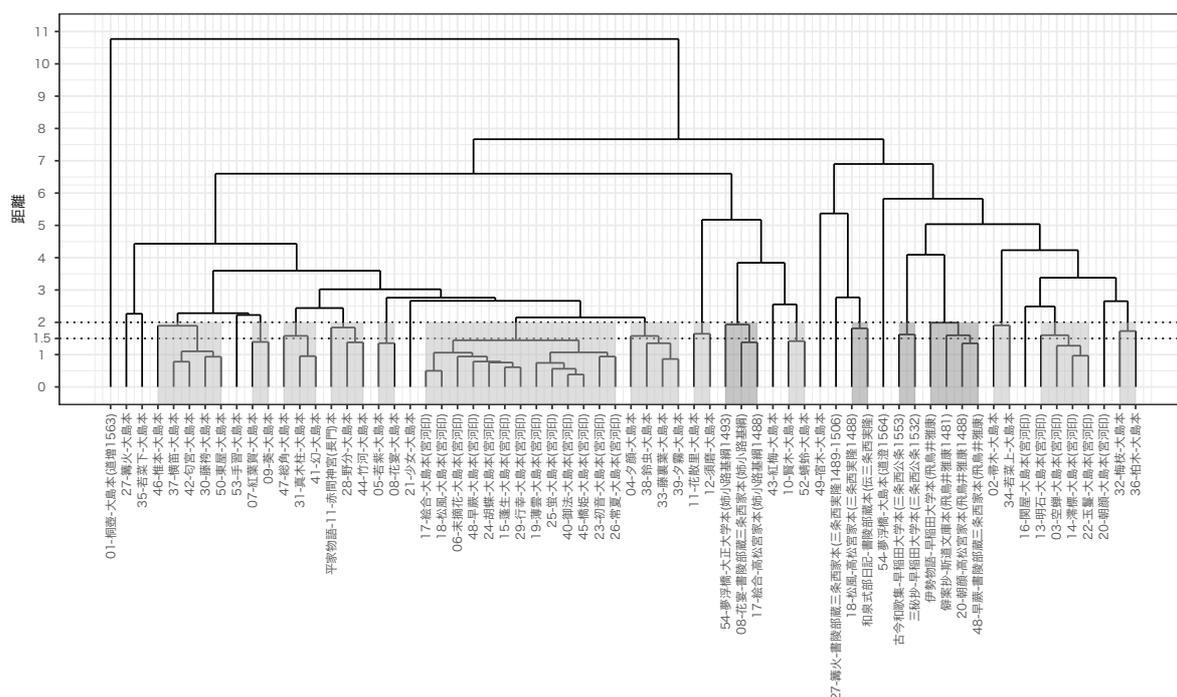


図4 1gramの階層的クラスター分析の調査結果

でき、その中でもより距離が0に近い写本間関係にある写本は、相対的にその可能性が高い、と言える。試みに距離1.5として点線を引くと、中央に位置する「宮河印」の13写本や、最も左に位置する群であれば、「横笛」、「勾宮」、「藤袴」、「東屋」は同筆の可能性を指摘できる。

主成分分析の結果と比較すると、階層的クラスター分析の結果は、同筆の可能性のある多数の群の存在を指摘することができ、書写者の人数が明らかではない多量の写本の分類を試みる際に適している、と言える。

### 4.3 2gram を用いた大島本の分類

4.1.2 で述べたように、仮名字母の 2gram を用いて写本間距離を計算する場合には、同程度の本文長を持つ本文データを扱う必要がある。また、同一の作品や同一の巻は互いに似た本文を持つため写本間距離が近くなる傾向がある。そこで、本調査では、大島本 53 写本と、書写者が明らかな写本のうち、源氏物語写本ではない雅康筆の 2 写本と公条筆の 2 写本の計 57 写本を対象とした。本文が長い写本は、調査する本文を 20 丁分の 5000 字から 6000 字に揃えた本文データから 2gram を生成し、写本の分類を試みた。調査はこれまでの仮名字母の調査と同様に主成分分析と階層的クラスター分析を用いた。

#### 4.3.1 PCA の結果と考察

1gram の主成分分析と同様に、分析前に、出現しない仮名字母と、資料間で差がない字母、同音の仮名の中で相関が高い二つの字母はどちらか

一方の字母、を分析対象から除外した。その結果、出現した 9160 の 2gram の数うち、4553 を用いて分析することとなった。

主成分分析では相関分析を用い、第 1 主成分の寄与率は 4.6%、第 2 主成分の寄与率は 3.4%であった。二次分析として k 平均法を用いた非階層的クラスター分析を行った結果を図 5 に示す。

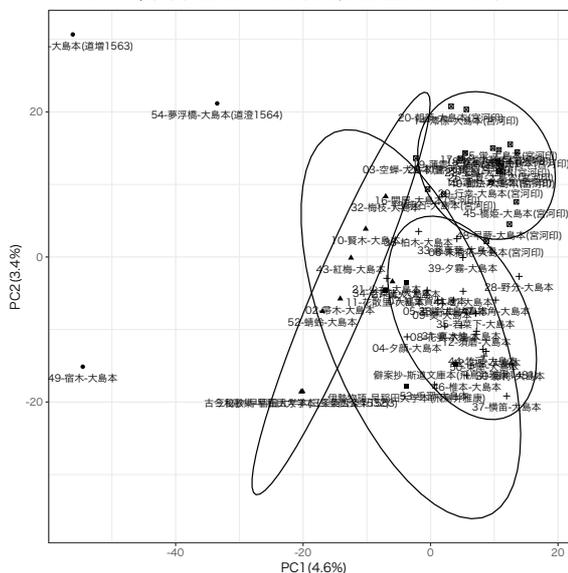


図5 2gramの主成分分析の結果

図5からは、大島本を中心とした写本は主として4群に分類され、楕円として表されている。「宮河印」のある写本は、全て右上に位置する楕円に含まれ、その他の写本は含まれていない。それ以外の写本に関しては、1gramの主成分分析結果と

同様に、詳細な写本間関係を可視化できていない。2gramの主成分分析は、1gramの主成分分析の結果と異なり、「宮河印」の有無で写本が分類できる可能性がある結果となった。

### 4.3.2 HCAの結果と考察

全写本の中で、同音の2gramが一つしか出現しない場合を、誤写といった要因による文字列と見做して除き、それ以外の全ての2gramを対象に階層的クラスタ分析を行った。調査対象となった2gramの数は9088であった。資料間の距離にはIR距離を用い、クラスタ間の距離の計算方法には、最長距離法を用いた結果を図6に示す。

図6では、ほぼ中央にある「関屋」「明石」「空蟬」を除くと、中央左に「宮河印」のある写本が群を構成する。「関屋」は文字数が少ない「花散里」や「篝火」と群を成すことから、文字数が少ないことが原因で別群となると考えられる。

右に位置する同筆の雅康写本と公条写本を参考に距離750で点線を引いて考察すると、多くの「宮河印」のある写本が群を構成し、群内の写本間距離は互いに近いことが明らかになった。

### 4.4 仮説とその検討

大島本の書写者とされてきた飛鳥井雅康筆との従来の説に対して、佐々木[4]によって示された主張のうち、書写者推定に関係する主張を取り上げる。それらを仮説と見做し、これまでの分析結

果を用いて検討する。

#### 仮説 1) 「大島本は『関屋』の奥書が根拠とされてきた飛鳥井雅康筆本ではない」

雅康筆写本は図4のHCAの結果より群を構成していることから、互いに仮名字母の出現傾向が似ていることを指摘できる。仮に大島本の中に雅康筆の写本が存在すると、その写本は、雅康筆写本との距離は近く、それら写本と群を構成する可能性が高い、と言える。しかし、図4からは、雅康筆写本は、どの大島本の中の写本とも距離2以下で群を構成しない。この結果は、仮名字母の出現傾向の点からは、大島本の中に雅康筆の本文を持つ写本が存在する可能性が低いことを示している。但し、本調査では本文の仮名に調査対象を限定しているので、奥書や注記に雅康が関わっていた可能性は明らかにできない。

「関屋」に関しては、これまでの調査結果[1][2]においても指摘してきたように、本文の文字数が1956文字と少ないことから、本文文字数が少ないために、写本間距離が遠く計算されるか、それとも、仮名字母の出現傾向が異なるために、写本間距離が遠く計算されるのか、を明らかにすることができない。しかし、「関屋」は、雅康筆とされる写本とは距離が遠く、他の群に近い距離に位置していることから、雅康筆の可能性は低いのではないかと、と言える。これは同様の条件を持つ、

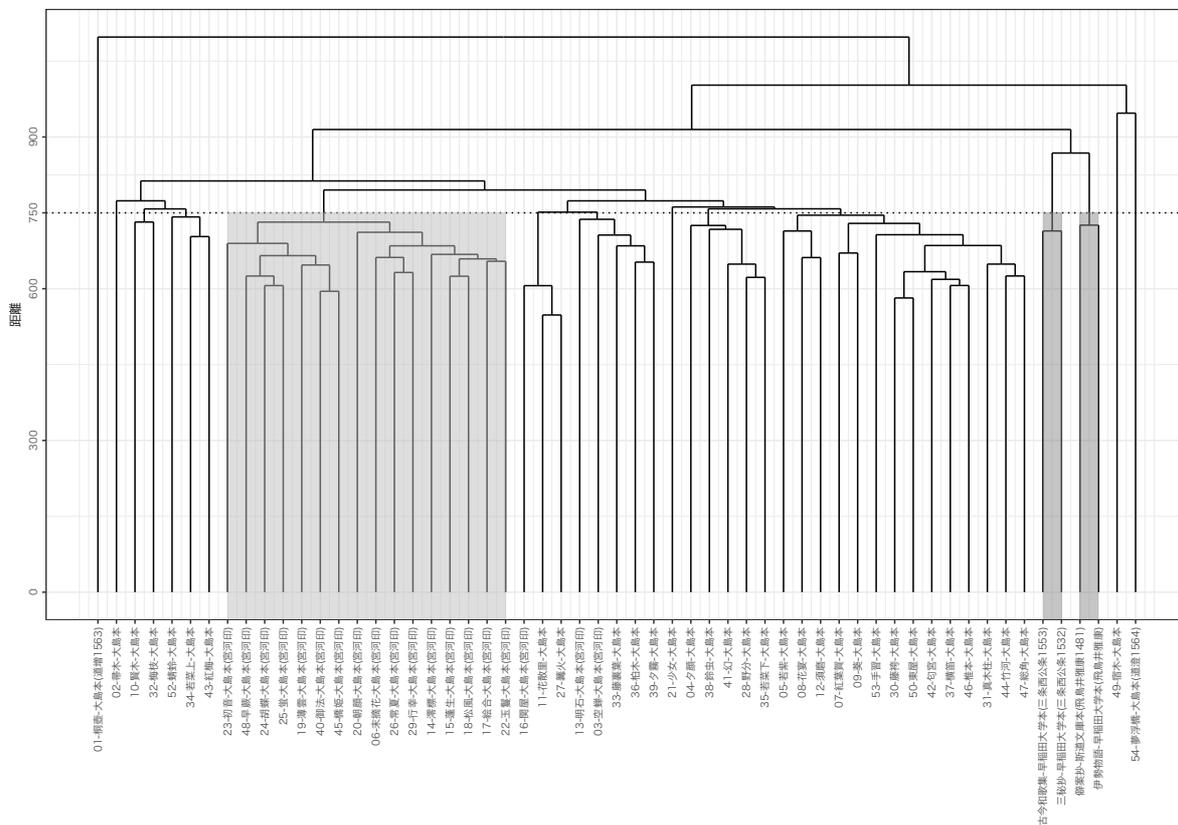


図6 2gramの階層的クラスタ分析の調査結果

実隆筆の書陵部蔵三条西家本「篝火」が、実隆筆の他の写本とは距離があるが、相対的には実隆筆に近く、その他の写本とは異なる群に分類されていることから裏付けることができる。

## 仮説 2) 「大島本は『宮河印』の有無により大島本は二分類することができる」

図4より、薄い灰色で強調した「宮河印」のある写本は、主として二つの群に分類されている。図4では、階層的クラスター分析の群構成法として最長距離法を用いた結果、二群に分類されているが、この最長距離法を群平均法に変更すると、この二つの群は、「明石」と「関屋」「朝顔」を除き、一つの群を構成する。このことから、「宮河印」のある一部の写本は互いに近い距離にあり、その距離の近さから、同筆である可能性を指摘できる。また、図6より、2gramの分類結果においても、雅康筆や公条筆の写本間距離以下にある、薄い灰色で強調した「宮河印」の一部の写本は写本間距離が近く群を構成し、同筆の可能性はある、と言える。

今回の複数のデータと分析方法を用いた調査結果からは、詳細においてそれぞれ異なる結果とはなったが、全ての調査結果で「宮河印」のある13写本は同じ群に分類された。これらの13写本に関しては同筆の可能性はある、と言えるだろう。しかし、同時に、今回の調査においては、この仮説が主張するような「宮河印」のある全ての写本が同筆であるとの指摘を、一つの群を構成するといった明らかな分類結果に基づいて確認することはできなかった。

## 5. まとめ

本論文では、これまでの調査で得た仮名字母の出現傾向の知見を用いて、大島本源氏物語を中心に、飛鳥井雅康筆写本との比較を通して、書写者の推定の調査報告をした。その結果、仮名字母の出現傾向の点からは、大島本の本文の書写者の中に、雅康筆写本が存在しない可能性が高いことを指摘した。また、複数のデータと複数の分析方法を用いた結果からは、「宮河印」を持つ一部の写本に関しては分類ができ、同一書写者である可能性を示した。しかし、詳細は不明なことが多く、今後、異なるデータに対して同様の手法を用いて、さらなる分析方法や結果の比較と検討をする必要がある、と言える。

## 謝辞

本研究は JSPS 科研費 JP19K00349 の支援により実施された。辞案抄は慶應義塾大学附属研究所斯道文庫に閲覧許可をいただいた。

## 出典

- 1) (財)古代学協会古代学研究所(編):大島本源氏物語, 角川書店, (1996,1997).
- 2)紫式部(著):高松宮御蔵河内本源氏物語, 臨川書店, (1974).
- 3)宮内庁書陵部図書寮文庫:源氏物語(青表紙本系).  
<https://shoryobu.kunaicho.go.jp/Toshoryo/Detail/1000629260000>
- 4)大正大学附属図書館:源氏物語写本.  
[https://www.tais.ac.jp/library\\_lab/library/genji/](https://www.tais.ac.jp/library_lab/library/genji/)
- 5)慶應義塾大学附属研究所斯道文庫:辞案抄, 092-ト 25-1.  
6)早稲田大学図書館:伊勢物語.  
[http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/he12/he12\\_04548/index.html](http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/he12/he12_04548/index.html)
- 7)宮内庁書陵部図書寮文庫:和泉式部日記(三条西家本).  
<https://shoryobu.kunaicho.go.jp/Toshoryo/Detail/1000613360000?searchIndex=7>
- 8)早稲田大学図書館:三鈔.  
[http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/he02/he02\\_04867\\_0004/index.html](http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/he02/he02_04867_0004/index.html)
- 9)早稲田大学図書館:古今和歌集.  
[http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/he04/he04\\_06080/index.html](http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/he04/he04_06080/index.html)
- 10)赤間神宮:平家物語:長門本, 山口新聞社, (1985).

## 参考文献

- [1] 齊藤鉄也:仮名字母の出現傾向を用いた藤原定家書写資料の調査, 情報処理学会論文誌, Vol. 59, No.2, pp.315-322(2018).
- [2] 齊藤鉄也:仮名字母の出現傾向を用いた日大三条西家本の調査, 人文科学とコンピュータシンポジウム論文集, Vol.2018, No.1, pp.59-66(2018).
- [3] 池田亀鑑:源氏物語大成校異編, 中央公論社, (1984,1985).
- [4] 中古文学会関西部会(編):佐々木孝浩:「大島本源氏物語」に関する書誌学的考察, 大島本源氏物語の再検討, 和泉書院, (2009).
- [5] 田村 隆:大島本『源氏物語』の表記情報(科学研究費補助金基盤研究(A)2013年度研究成果報告書「日本古典籍における【表記情報学】の基盤構築に関する研究 III」), 国文学研究資料館, pp.91-98 (2014).
- [6] 中古文学会関西部会(編):加藤洋介:大島本源氏物語の本文成立事情 - 若菜下巻の場合 -, 和泉書院, (2009)
- [7] 小川栄一:長門本平家物語の言語年代(平成20 - 23年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告), (2013)
- [8] 金明哲:テキストデータの統計科学入門, 岩波書店(2011).

表1: 調査対象とした大島本及びその他写本

写本名と(伝承)書写者, 書写年代	調査対象本文	仮名文字数	仮名字母数
01-桐壺-大島本	14 丁ウまで	5547	106
02-帚木-大島本	18 丁オまで	5883	109
03-空蟬-大島本(宮河印)	全文	4677	103
04-夕顔-大島本	17 丁オまで	5677	108
05-若紫-大島本	17 丁ウまで	5500	105
06-未摘花-大島本(宮河印)	16 丁ウまで	5613	103
07-紅葉賀-大島本	20 丁オまで	5750	111
08-花宴-大島本	全文	4178	99
09-葵-大島本	20 丁オまで	5935	109
10-賢木-大島本	19 丁オまで	5679	112
11-花散里-大島本	全文	1568	96
12-須磨-大島本	17 丁オまで	5462	101
13-明石-大島本(宮河印)	18 丁オまで	5465	110
14-滯標-大島本(宮河印)	19 丁ウまで	5803	106
15-蓬生-大島本(宮河印)	20 丁ウまで	6244	101
16-関屋-大島本(宮河印)	全文	1956	93
17-総合-大島本(宮河印)	19 丁オまで	5579	100
18-松風-大島本(宮河印)	18 丁ウまで	5522	101
19-薄雲-大島本(宮河印)	18 丁ウまで	5438	101
20-朝顔-大島本(宮河印)	19 丁オまで	5508	101
21-少女-大島本	17 丁オまで	5615	106
22-玉鬘-大島本(宮河印)	全文	16546	117
23-初音-大島本(宮河印)	全文	5506	105
24-胡蝶-大島本(宮河印)	19 丁分	6570	101
25-蛩-大島本(宮河印)	19 丁オまで	6128	99
26-常夏-大島本(宮河印)	19 丁分	6694	101
27-篝火-大島本	全文	1360	86
28-野分-大島本	21 丁オまで	6736	98
29-行幸-大島本(宮河印)	全文	11542	105
30-藤袴-大島本	全文	5656	99
31-真木柱-大島本	27 丁分	8867	110
32-梅枝-大島本	18 丁オまで	5433	106
33-藤裏葉-大島本	17 丁オまで	5416	111
34-若菜上-大島本	17 丁ウまで	5592	107
35-若菜下-大島本	17 丁ウまで	5606	97
36-柏木-大島本	16 丁ウまで	5262	99
37-横笛-大島本	17 丁オまで	5429	101
38-鈴虫-大島本	全文	5702	107
39-夕霧-大島本	17 丁オまで	5541	107
40-御法-大島本(宮河印)	18 丁オまで	5663	99
41-幻-大島本	19 丁ウまで	6311	108
42-匂兵部卿宮-大島本	全文	5181	103
43-紅梅-大島本	全文	5005	108
44-竹河-大島本	16 丁オまで	5470	106
45-橋姫-大島本(宮河印)	全文	15629	108
46-椎本-大島本	17 丁オまで	5310	105
47-総角-大島本	17 丁ウまで	5489	97
48-早蕨-大島本(宮河印)	全文	7353	102
49-宿木-大島本	18 丁オまで	5583	106
50-東屋-大島本	17 丁オまで	5504	101
51-浮舟			
52-蜻蛉-大島本	16 丁オまで	5465	108
53-手習-大島本	16 丁オまで	5198	100
54-夢浮橋-大島本	13 丁ウまで	5515	114
20-朝顔-高松宮家本(飛鳥井雅康 1488)	15 丁オまで	5223	97
48-早蕨-書陵部蔵三条西家本(雅康)	全文	7070	105
辟案抄-斯道文庫本(雅康 1481)	26 丁オまで	6406	116
伊勢物語-早稲田大学本(雅康)	24 丁ウまで	5334	109
08-花宴-書陵部蔵三条西家本(姉小路基綱)	全文	4048	117
17-総合-高松宮家本(基綱 1488)	16 丁オまで	5392	119
54-夢浮橋-大正大学本(基綱 1493)	17 丁ウまで	5280	118
18-松風-高松宮家本(三条西実隆 1488)	16 丁ウまで	5282	122
27-篝火-書陵部蔵三条西家本(実隆 1489-1531)	全文	1360	103
和泉式部日記-書陵部蔵本(伝実隆)	20 丁オまで	6330	110
三鈔(三秘抄)-早稲田大学本(三条西公条 1532)	26 丁オまで	6368	117
古今和歌集-早稲田大学本(三条西公条 1553)	21 丁ウまで	6856	112
平家物語赤間神宮本	19 丁分	5569	95